



ぱんだたんの  
冒険



かずお

バリバリ、サラサラ！

ぱんだたんは空輸箱を開け放たれると、勢い良く飛び出して、叫んだ！

「にゃ～～～」

びっくり顔で見つめる私。そしてぱんだたんは私をみてこういった。

「・・・さんかにゃ？」

「そうですが・・・」びっくりしながらも、答える私。てっきり人形だと思っていたが、生きたパンダだったのだ！。ぱんだたんは箱から出て降りると、私の膝の上に乗った。

「ぱんだ10さいにゃ、少しの間ですが、よろしくお願いしますにゃ」

そこまでは10さいとは思えないしっかりしたぱんだだなと関心していたのだが、やはり10さい、好物のとりの内臓には、子供らしさがうかがえる。

「ぱんだたん、とりのないぞう好きなの知っていたし、あとチョコも用意しておいたよ、食べる」

ぱんだたんの目は、本当にハートマークになり好き光線が出ているような視線を感じながら、用意しておいたとりのないぞうとチョコを差し出すと、ぱんだたんはものすごい勢いで、食べだした。

「もぐもぐもぐもぐ」

「ぱんだたん、急がなくても大丈夫だって・・・」

その言葉はぱんだたんの耳には入らない様子で、あっという間に食べ終えてしまった。大量にあったはずのとりのないぞうとチョコは小さいぱんだたんの腹に収まってしまった。

ぱんだたんとの楽しい毎日が始まった！。

ぱんだたんは朝から、家の中を楽しく探検していた。

そして発見する度に私に聞いて、嬉しそうに話す。

「車があるにゃ、乗ってどこかにでかけようにゃ！」

「ごめんね、その車は車検してないから動かないのよ」

悲しそうな顔をしながらも、ぱんだたんは私を慰めてくれる、なんて心の広い、10さいだと私も毎日発見がある。そしてまた家を探検しはじめる。

でも、今日は知人が来る日だったので、ぱんだたんに知らせると、目を輝かせながら言う。

「いつ来るにゃ、早く逢ってみたいにゃ」

「まだ、来ないよ。探検してたら」

「パソコン貸してにゃ」ぱんだたんは、そう言って私がOKを出すと、Twitterページから弟のツイート確認していた。

「弟が気になるの」

「まだ、弟は子供にゃ！、ツイートにミスが無いかチェックしているにゃ」

その時はお姉さんの顔で、しゃべっているぱんだたんが一瞬大人に見えたが、ほんの一瞬ですぐいつものぱんだたんに戻っていた。

「探検にゃ、この前見つけた、くまの人形と遊んでくるにゃ」

知人が来るまでの間、ぱんだたんはここにくるまでの事を話してくれた。

ぱんだたんはいつもの通り、ジャーマネが用意した空輸用の箱に入る。

「ジャーマネ、行ってくるにゃ」

ジャーマネの腰痛が心配であるが、ぱんだたんは空輸されることになった。

ぱんだたんが空輸されるきっかけはあることから始まった、それはツイッターでいつもTL上でやりとりしているアカウントさんがいて、そのアカウントさんの所に空輸するかしないかで、ぱんだたん和ジャーマネの激しい激論があり、ジャーマネが空輸を英断したのであった。

「ジャーマネ、いいのにゃ？」

ジャーマネはいつもの笑顔でうなづき、ぱんだたんを怪我をしないよう、毛布で包んで箱に寝かせるように置く。

「ご迷惑になるような事はしちゃだめだからね。ぱんだ」

「わかっているにゃ」

嚴重に梱包されて、ぱんだたんはうちに着いたという話を、ぱんだたんは話してくれた。

「ぱんだたん、ほんとうにぱんだたんがやっての？」

「そうにゃ！、ジャーマネがツイートなんてしてないにゃ、任せていたら、10さいのツイートでは無くなってしまいうにゃ」

てっきり、ぱんだは人形でジャーマネが演じてるのかと思っていたが、これは空輸されてきたひとだけで守られなければいけない秘密らしい。

「にゃ」ぱんだたんは、笑顔で私をみて、知人が来てくれたことを教えてくれた。

知人はいつもの如く、自分が運転してきた車に乗せる、ぱんだたんも引き続きのり、私の膝の上に乗る。知人は不思議そうな顔をしてぱんだたんをみて、ぱんだたんは、はっと気づき挨拶を始めた。

「ぱんだ10さいです。よろしくお願いします！」

知人もつられて挨拶する

「あ、どうも、小橋です」

ぱんだたんは不思議そうな顔をして、小橋を眺める・・・。

「どこかでお会いしませんでしかにゃ」

ぱんだたんとは一度もあったこともない。小橋はTwitterなどやる人間ではなく、音楽一本でやってきたバンドマンだ。ギターテクニックにはすでにプロの域とも言われ、デビューも近いと言われている。

今日も、作ってきた曲を私のために持ってきてくれたのだ、すごい曲ばかり、感想は同じでいいんだろうかと思っているのだが、小橋は気にしていないようだ。

今回の曲はメタルだ、ぱんだたんは途中で耳をふさぐか逃げ出すだろうと思った。それがである、ノリノリで、曲よりぱんだたんのダンスがすごく、面白いのだが、きちんとリズムにのりしっかりとしたダンスだった。

「にゃ～久しぶりに踊ったにゃ！小橋さんありがとうにゃ」

「ぱんださんのダンスもすごかったですよ」ぱんだたんは顔を真赤にして、私の方をみる。

「恥ずかしいのかい？」

「そうじゃないにゃ、初めて褒められたにゃ」

「ジャーマネさんとか、他の人には見せる機会はなかったの？」

「隠したのにゃ、ダンスの事は今まで誰にも見せたことないのにゃ」

「えー」二人、びっくりして声をだした。ぱんだたんはびっくりすることではないという様子で私たちをみる。

「？、どうしたにゃ、びっくりすることないにゃ、趣味にゃ」あれほどの、華麗なダンスをしたのにも関わらず、趣味だなんてびっくりするしかなかった。練習はあんまり出来ていないらしいのだが、どう考えても、プロのレベルだ。なんというぱんだと再確認した今日だった。

小橋の曲をダビングして掛けっぱなししていたら、ぱんだたんは踊り続けていた。楽しそうだったので、止める必要性はないかと思いながら、パソコンでの作業をはじめた。

時間がたつにすれ、ぱんだたんの踊りは切れがましていき、プロ並みになってきて、本人は疲れる様子もみせず、踊りに夢中になっていた。

「踊るのはたのしいにゃ、一緒に踊ろうにゃ」そういいながら、ぱんだたんは私の手を取り、教えてくれるのだが・・・ロボットダンスになってしまう。元々運動音痴でまったくだめで見せられたもんじやないのは、ぱんだたんがわかっているようなのだが、楽しそうな顔で踊っているので、つい続けてしまった。

でも、ぱんだたんでも空腹には勝てず、ダンスは終了となった。

今日は太巻き寿司だ、ぱんだたんは水ものまず、一気にたべようとしている、かわいいのだが、とめておいた。

「ぱんだたん、やめておいたほうがいいとおもうよ」

不思議そうな顔をしながら、ぱんだたんは一口、小さくパックと食べる。これがものすごい勢いでかわいいのだ！！。心のなかで「ぱんだたん、もえ~~~~~」と叫んだのが、ばれたのかどうか分からないが、笑顔で私を見ていた。なんか恥ずかしくなり、照れ笑いをした。

「ふふ」

「なにを笑っているにゃ、ぱんだになにか付いているかにゃ？」と聞いてくるぱんだたんがまた、かわいいのだ！、ぱんだたんはもえの権現といってもおかしくない。

「なにもついてないよ、食べていいよ」

ぱんだたんは、安心したように、お茶を飲みながらたべている。とぱんだたんの事を眺めていたら、ぱんだたんが食事を終えてしまった。

「食べないのかにゃ？、調子でもわるいのかにゃ？」心配そうに聞いてくる、本当のこともいえず、急いで食べたら、詰まって咳き込んでしまった。

「子供にゃ」といいながら、背中をさすってくれるぱんだたん。

ぱんだたんの優しさと可愛らしさをふれた一日だった。

ぱんだたんを自転車にのせて、近所の買い物に行くことにした、ぱんだたんは不安そうな顔もせず乗ったが、運転する私としては不安でいっぱいであった。一番乗り心地が悪い場所でもあるし、一応毛布をひいてみた、ぱんだたん聞いてみると。

「快適にゃ」考えて見れば、止まった状態なわけで、なんとも言えないので、小橋に電話で相談してみることにした。

「すまない。ぱんだたんのことなだけでさ、自転車の籠にのせて出かけようかなと思うんだけど、快適にするにはどうすればいいだろう？」

小橋はだいぶ困り果てたようす、なにせ、音楽しかやってこなかったやつだ、仕事は手作り小物の販売のサーバー管理位で、大工仕事などしたこともなく、無理難題にちかかった。でも小橋は優しい男、すぐさま、動物の扱いになれている人間に連絡をして、対策を導き出したのだ！。大量の新聞を軽くまとめてかごに敷き詰める、この時押し潰さないようにしてその上にぱんだたんが乗る部分にダンボールをおく、周りを同様にした。さすが、小橋。メタルバンドのリーダーだけのことはある。

ぱんだたんの安全が確保されたことだし、近くまで自転車で出かけることにした。そしてぱんだたんが叫ぶ。

「出発進行にゃ！」

私は頭の中でこれってETじゃないかとおもいながらも、まず、地元の駅を目指した。

駅は近代化された鉄筋ではなく、木造で本線のなかでも鉄道マニアからは貴重な駅として有名らしかった。ぱんだたんもそうらしく興奮気味だった。

「にゃ~~~~~ (≧▽≦)。こんな貴重な駅の近くに住んでるなんてうらやましにゃ！。ぱんだの住んでいるところは、全部鉄筋にゃ、面白みなんてなにも無い。唯一楽しみは電車だけにゃ」に始まり、ぱんだたんの鉄道マニアぷりを発揮する話は一時間以上続き、私も好きなのだが途中からついていけなくなり、授業状態になってしまった。

ぱんだたんも満足した様子でいう。

「ここで記念に写真撮ろうにゃ！！」とぱんだたんが言ったのは、午後4時。着いたのは午後1時だったので、ほかに行く予定の場所にはいけなかったので、写真だけとって帰ることにした。

今日はある山の神社参りにぱんだたんともにきた。ぱんだたんは大はしゃぎで、袋から出たがっていたが、私は恥ずかしくてだせずにいた。袋からぱんだたんの声が聞こえる。

「出してにゃ、外がみたいにゃ」

人もまばらになり、みられることはないだろうと思い、ぱんだたんを袋から出してあげた。まずぱんだたんは、御神体を守る牛をみて、不思議そうに眺めている。

「それがどうしたの？」

ぱんだたんはそれをまってましたとばかりに、私をみると始めた。

「この牛さん、入り口の方じゃなくて、神社を見てるにゃ？」

「それは、この神社を守るためでしょ」

「なぜ、牛なのにゃ？」

「ごめん、それは私も知らない」

残念そうな顔をしながら、神社を堪能し始めた、ぱんだたんは私から、デジカメを借りると、ありあらゆる場所にレンズを向け始めた、特にお気に入りはその牛だった。もう十枚くらい角度変えてとっている。

「牛がすきななの？」

ぱんだたんは一息ついたところで、話し始める。

「ジャーマネが牛肉が好きにゃ、だから写真だけでもとってあげようかと思ったにゃ」

「ふ～ん。ジャーマネは牛肉が好きなんだね」

「・・・にゃ」

「なんて言ったの聞こえないよ、ぱんだたん」

「これはいくら、なんでも言えないにゃ、ぱんだたんは秘密は守る子にゃ」

その後、牛の話は出て来ない、ぱんだたんは神社のありとあらゆるものに興味を示して、聞いてきたが、私には知らないこともあり、ぱんだたんのちからにはなれなかったが、楽しそうにしていたので、安心した。

ソロソロ、日も暗くなってきたので、ぱんだたんに帰ろうといった。

「もうそんな時間かにゃ？」

声だけが聞こえる、形はないがぱんだたんの声である、小さいのでなにかの影に隠れるとすぐ分からなくなるのだが、ものみごとに隠れるとは関心しながら、帰ろうともう一度いう。

「喉が乾いたにゃ、あそこで水飲んでから帰っていいかにゃ」といいながら、ひっそりと現れたぱんだたんは公園の水飲み場に行き、私をまつ、あまりにも小さいので、誰かが持ち上げてあげないと、水も飲めないのだ。

ぱんだたんを持ち上げて、飲ませて袋にいれた。

「帰るにゃ」というと、疲れたのかスヤスヤと眠ってしまった。



今日はぱんだたんとともに、小橋を連れてゲームセンターに行くことにした。ぱんだたんをなぜ、ゲームセンターに連れていくことにした理由であるが、ぱんだたんは過去、ゲームセンターに行ったことがあるらしいのだが、ジャーマネさんの趣向に押されて、自分のやりたいやつができなかったらしいのだ、そこで私に連れて行ってと頼まれたのだが、あいにく私はゲームセンターは行ったことがあるがやったことは数回程度で、ヘタを通り越してできないのである。

そこで、私は音ゲーなら任せておけといていた、小橋を連れていくことにし、車もついでに小橋を使うことにして家の前でまっていた。

ひどいように見えるかもしれないが、ぱんだたんが小橋の車をお気に入りにしてしまったのである、ちなみに、うちの車の感想をいうとこういう返事が帰ってくる

「うーん、地味にゃん。かかっている音楽は良いんだけどにゃ」ちなみにここで、ぱんだたんがいう音楽とは小橋作曲であり、結果私の車は地味らしい。という理由もあり、小橋に頼み込んで、行くことになった。車中、流れている曲は小橋の作曲のものである。

近くのゲームセンターは昼間それほど、混んでないので、ぱんだたんを連れて行くには好都合だった。ついて、最初にぱんだたんが目指したのが、クレーンゲーム。

「弟ために、人形とってほしいにゃ。寝るとき一人で寝れなくて、ジャーマネと一緒にねるにゃ。ソロソロ、一人で寝られるように特訓のためにゃ！」

小橋は最初困ったような顔をしていたが、ゲームを始める、脇でぱんだたんは取る人形を指示していた、私はちょっと離れてみることに。

ぱんだたんの声が聞こえてくる・・・。

「それじゃないにゃ、弟は嫌いなのにゃ、そのとなりのヒラックマにゃ」

ちなみに、ヒラックマとはすごい人気で、白でコヒラックマもあり、イエローバードがツッコミである、よく似た内容のものがあるが、空見だろう。なぜかソーシャルメディアに詳しいというキャラ設定があるのだが、不思議だ。絵本もでており、セリフの最後は(^\_^)でおわる。どこかでおなじような事を見かけたかもしれないがそれも、空見だろう。そしてメガネをかけているのだ。同じような方を見たかもしれないと、いや空見だろう。

ぱんだたんのゲームセンターめぐりはまだ続く。

ぱんだたんのゲームセンターめぐり、まだ、UFOキャチャーで小橋に指示していた。

「おいしいにゃ、あと一歩にゃ」小橋も必死でヒラックマを取ろうとしていた、ぱんだたんは応援団長のような感じで表情だ。そんな二人をみながら、すこし和んでしまった。小橋はチラッと私の方をみて、助けを求めているような表情をする。でも私はゲームが下手なのはよく承知しているので、なんともいえず、戦場に復帰していく。

ぱんだたんは幸せそうな顔をしながら、私をみていう。

「小橋さんは、優しいにゃ。ヒラックマが取れそうにゃ、そんな友人をもつ人はもっと優しくていい人にゃ」ぱんだたんは私に、ウィンクをして小橋を応援を再開する。

なんとその、ゲーム料金は私が全額出しており、早く取ってくれよと小橋にエールを送ってはいるのだが、小橋も苦戦を強いられている。

ぱんだたんも、諦めかけたその時である、奇跡はおきた。

「キターww^v/v v v ~(^▽^)-ww^v/v v v ~-!!」

ぱんだたん、小橋が同時に叫ぶ。私は丁度ジュースを買いに行き行って戻ってきた時で訳がわからず、二人のところにいくと、なんとヒラックマがぱんだたんの手元にあるではないか。

ヒラックマのあの笑顔が再現され、片手には本を持っており、ソーシャルメディアのことが書かれていると言われているが謎である。噂ではフェイスブック、ツイッターのアカウントまで存在するといわれているヒラックマ。ファンクラブまであるらしいが、事実は定かではない。

次にぱんだたんが選んだゲームは音ゲー。まるきっし、音痴の私にはまったく触れる気すらおきないが、小橋の目つきは一瞬にして変わる。それはなにかに取り憑かれたようなという表現がてきかくかもしれない。

ぱんだたんがセレクトした曲は、まさにメタルの王道であり、音ゲーの中でもスーパーエクストラハードと言われ、今まで猛者が挑戦してもオールクリアを取ることが不可能といわれた伝説の曲である。曲がスタートすると同時に、目にも見えぬ速さで、的確にボタンを押していく、それは神業ではないかと思わせる凄さだ、その曲が流れると、人だかりができ見学する人も増えるので、ぱんだたんを袋にかくしておいた。

数分後・・・割れんばかりの盛大な拍手が巻き起こった。

袋の中から、ぱんだたんも拍手してた。

「小橋さんはすごいにゃ」

騒ぎも終わり、見学していた人もいなくなったころに、小橋がこちらにやってきた。

「もう帰ろうか」

お祭り騒ぎのような、ゲームセンターではあったが、楽しい一日だった。

ぱんだたんは今日はお昼寝をしていた、何もかけずに、それもまたかわいい寝顔でいいのだが、風邪を引いたりしたら、もとのこもないのでパンダ柄のタオルケットをかけた。

今日は静かに過ごすかなと思いながら、本を手に取り読書を始める。

だが・・・その静寂もすぐに打ち消された、ぱんだたんがムクリと起きた。

「なにしてるにゃ？」

「読書だよ」

ぱんだたんは興味津々で私の読んでいる本を覗き込んでくる。

「読書なんてしてないで、遊ぼうにゃ！」

渋々、本を片付けてぱんだたんの遊びたいことを聞いてみることにした。ぱんだたんはごそごと自分の持ってきたバックの中から、何かを出し始めた。それはベビーフットである。

遊ぶとは全く正反対のものを取り出してきて、ぱんだたんは説明をはじめた。

「これは削らない角質ケア、ベビーフットにゃ」、ジャーマネの所からこっそりもってきたにゃ」

私は驚いた表情で聞き返す。

「えージャーマネさんの持ってきて大丈夫なの？」

「ジャーマネの物はぱんだの物にゃ」(-`д´)キリッという表情で言い切ってみせた、逆をいえばぱんだたんの物をジャーマネさんが勝手に使っていていいということになるかもしれないのに、ぱんだたんは気づいていない。しかし、ぱんだたんはすでに説明書を取り出して、ベビーフットを始めようとしているではないか。

慌てて、私は説明書をぱんだたんから奪い取るようにして、見始める。

「って・・・これ、2時間履いていなきゃいけないだよ。ぱんだたん、出来るの？」

すこし出来そうにないような顔をしながらも、言い切る。

「出来るにゃ。履ききって見せるにゃ」

パッチテストなどは事前にやってあるらしく、ぱんだたんは計画的に今日実行するための準備をしていたようだ。

私は二度経験があるので、問題はない。ぱんだたんが我慢できるのかという疑問ばかりが浮かぶ、途中でやめたにゃなんていいださなければいいが。

ぱんだたんの決意は固く、ベビーフットをやることになり、あえて誓約書までぱんだたん、自ら書き、決意の表れをみせた。

小さいぱんだたんの足にはちょっと大きなサイズではあったが、一回り大きいくらいだったので、テープで補強して理由は、ある程度動き回ることを想定してのことだ。

私もただ、いつものように自分のしたいことをしているのも気が引けるので、ぱんだたんの相手はするつもりで、用意をしていると、ぱんだたんはいつものように、大好きな笹を食べ始め、すこし安心しながら、本やおもちゃなど、家の中からかき集めた。ぱんだたんのとなりに座る。

「冷たいにゃ〜」ベビーフットの最初感じる感想が冷たさである。これは事前に足湯をして、足をふやかしておくなどの処置をすると回避は可能である、しかし、ぱんだたんのいきなりの宣言に、そこまで頭がまわらなかった。

「時間が経つと、慣れてくるから大丈夫だよ」というと、ぱんだたんは安心して、私が持ってきた本を読み始める。ベビーフットをしている時間はよくやることは、DVD鑑賞が一般的といわれているが、ぱんだたんは基本、家に来てから見ている様子はない。アニメは見ないんだろうかと不思議に思い、聞いてみた。

「ぱんだたんはアニメみないの？」

本から、すこし顔を出しながら、答える。

「見るにゃ、けどこの地域では放送されていないにゃ、だから、ジャーマネに録画を頼んでおいたにゃ」というと、本をまたよみはじめた。大阪と福島では放送内容が違うもんなと納得しながら、私も本を読みながら、お菓子をつまむ。ぱんだたんもつられてか、お菓子を食べ始める。

本を読み終え、二人でしりとりをはじめることにした、これはベビーフット (@\_BabyFoot) さんのおすすめである、一番時間つぶれるらしいが、私はぱんだたとやるのが初めてだ。

ぱんだたんが最初の言葉を考える。

「笹」やはり、そうきたかと思いながら、私の番だ、ぱんだたんは真剣なまなざしでこちらをみている。

「皿」

「ラッパ」

しりとりが続く、楽しいというよりかなり真剣勝負だ、ぱんだたん、こういう時は負けまいと全力で挑んでくるので、私も気合い負けしないようにしている。

時間はもう2時間がたっていた。

「ぱんだたん、2時間たってるよ」

「にゃ、もうそんなに時間がたったのかにゃ」

「そうみたい、しりとり真剣にやっていたからね」

ぱんだたんを風呂場で抱いて連れて行く。それは、ベビーフットを履いたまま歩くことは可能ではあるが、かなり歩きにくく、転ぶこともあり、実際転びかけた私である。

風呂の蓋のうえに座らせ、ベビーフットをはずして足を石鹸でよく洗い、タオルで拭いたら終了である。

。

ベビーフットをやったぱんだたん、なんの変化がないので不思議そうな顔をして自分の足を観察していた。

「ぱんだたん、効果が出るのは早くて二日くらい、遅くて一週間だよ」  
残念そうな顔をしながら、ぱんだたんは靴下をはく。

「すぐ出ると思ったにゃ、でもズル剥けしたらコンテストに出すにゃ」  
ぱんだたんはズル剥けコンテストに参加しようとしているらしいが、もうすでにコンテストは締めきっており、次回開催はまだきまってないという情報が入っているのが、夢を壊さないためにも、ここは黙っておこうと決意した私であった。

ぱんだたんは早速、家の中を探検しはじめるがあきてきたようなので、私は外に出ることを提案した。

「それいいにゃ、山に行きたいにゃ」最初の一言に耳を疑う、10さいのぱんだたんがいう場所といえば、遊園地かおもちゃ屋など子供が好きそうな場所を想像したのだが、山とは。やはり看板ぱんだは踏んで場数が違うなと勝手に感心しながら、山に行くための準備をして、電車に乗るため、駅に歩くことにした。時間を急ぐ必要性もなかったからだ。

「久しぶりにゃ」

「なにが？」

「歩くのが」

すんなり会話していて、びっくりした歩くのが久しぶりとは、今まで歩いていたのではと突っ込みたくなるを押さえて、ぱんだたんの訳を聞いてみることにした。

「移動のメインは車だったの？」

「ずっとジャーマネが持っている専用のバックに入って移動していたから、歩くのはそうないのにゃ」  
暗い顔でいうぱんだたん、ジャーマネさんの気持ちもわかるし、どちらにも偏れない自分がいたけど、ぱんだたんの暗そうな顔だけはみたくなかった。

「ここにいる間だけでも、歩こうね」笑顔で、ぱんだたんに行った。

「うん。いっぱい歩いて、徒競走の選手になるにゃ」ちょっと、間違っているような気がしたが、ぱんだたんの顔はいつも明るさが戻っていた。

そんな会話をしているうちに、駅につきホームで電車をまつ。

電車に乗るのは私は久しぶりで、ずっと車を運転していたので、ちょっと緊張感があったが、ぱんだたんがいるのだから、すこしは余裕をもたないと思っていた。あまり、人がいないのでぱんだたんは普通に横にたって待っている。ふいに、私をみていう。

「ぱんだ、電車が好きにゃ」満面の笑みでいう。たしかにぱんだたんのツイッターでの写真投稿をみると電車が映っている時が多い。

「そういえば、ぱんだたんの写真には電車とか駅構内多いよね」

「あれ、意図的にジャーマネに撮らせているにゃ、ぱんだの電車好きはよく知られていることにゃ、7さいが唯一、認めていることにゃ」

嬉しそうというより、誇らしげにとも言える表情で語るぱんだたん。思い出した、そういえば、北海道の焼き鳥屋さんの所にいったときの事を詳しく聞きたくなった所に、電車が入ってくる。グットタイミングだと思いながら、ぱんだたんの手を引いて、電車にのり、座席に座る。

電車内は、カラで誰も載っていないのではないかと思うくらいだった。ぱんだたんをバックに隠す必要性はないし、話も聞けそうと安心して、ぱんだたんを見る。

「ぱんだたん、北海道の焼き鳥屋の所で修行した時の話でよ」

ぱんだたんはまってましたとばかりの顔で、話しだす。

「最初、焼き鳥屋さんの所につくまでは、すごい緊張してたにゃ」

「なんで？」

「だって、ぱんだがいくから、毛が焼き鳥に混じったら大変にゃ。だから、防護服を用意しようとしてジャーマネにとめられたにゃ」

「行ってみてどうだった？」

「優しいいい人だったにゃ、ぱんだにも串打ちを教えてくれたにゃ」

「そう、ツイートでもしてたね。ビールをTLから頼んだり、コーラ頼んだりしてたよね」

「にゃ♡。焼き鳥屋さんも困り顔だったけど、ぱんだは嬉しかったにゃ、他の人も乗ってくれてうれしかったにゃ」

ぱんだたんの北海道の焼き鳥屋での修行は相当楽しかったのだろう、話がとまらない、私もTLから参加していたのでよく、分かっていたがTLでは出てこない部分の話をぱんだたんは、惜しげもなく話してくれる。

焼き鳥屋さんは大丈夫なんだろうかと思うくらい突っ込んだ事をぱんだたんは話していた。

「笹はやくたったの？」

「ぱんだたんが手放さず、いつも持っている笹はダメらしいにゃ」

「なんで？」

「衛生上の問題とかじゃなくて、使わないにゃ」

「あらま」

話し込んでいたら、目的地の駅についていた。危うく乗り過ごすところではあったが、なんとか電車を降りた。

さすが、大きい駅なので人も賑わっており、ぱんだたんをバックに入れることにした、見つかると目的地に行くところではなくなってしまう。今度はバスに乗る、ぱんだたんと話す時間ないくらい、すぐ山の近くのバス停につき、降りてぱんだたんをバックから出して、公園まで歩くことにした。

山の道であるが、舗装されておりぱんだたんが歩くには苦になるような道ではなかったが、上りさかできつくないかなと気を使いながら、歩いていた。

ふと、ぱんだたんが話し始める。

「福島に来て良かったにゃ」

なぜ、ぱんだたんはそんな事を不意に言うのだろうと不思議に思いながら、公園を目指す。

「今までいろんな人の所に空輸されて、楽しかったにゃ。今後、またいろんな人の所に空輸されると思うにゃ、愛されている人の所に、ぱんだが一番楽しいにゃ」

「いきなり、どうしたんだい？」

「この自然を見ていたら、言葉が出たにゃ」

なにもいわず、公園につく、ぱんだたんは最初に気になったのは、神社を守るためにいる、牛だった。私も牛？と思いながら、でも他の神社も見えないし、牛もありだろうと思いながら、ぱんだたんのあとをついて行く。

「近くで見たいから、ぱんだを持ち上げてにゃ」と言われ、持ち上げるとぱんだたんは早速、持参してきたカメラで写真をとる。細かく位置をしてくるので、その位置まで移動しては写真を撮る作業が数分続き、満足した様子で。

「降りていいにゃ、長い時間ぱんだを持ち上げてくれて、ありがとうにゃ」

ぱんだたんは降ろされると、すぐまた神社の方に歩いて行く。

子供のようにしゃいではないが、何もかもが興味津々でぱんだたんは、神社をみて回っては写真を撮っているのを、私は兄のような感じで見守った。

「なにをやっているにゃ、来てにゃ」

ぱんだたんと呼ばれて、我に返る、ずっと見ていたら自分が癒されているのに気づいたが、そんな事を考えている暇はなく、ぱんだたんの所に行く。

「お参りしていくにゃ」

神社のお参りの仕方に従い、お参りをする。ぱんだたんはなにをお願いしたのだろうと思いながら、公園の方に歩いて行く。

屋根がついたところで、ぱんだたんは自分のリュックサックからお菓子を取り出していた。私を見ると、せかす。

「早く、来るにゃ、腹が減ったにゃ」

私はなぜか、小走りでぱんだたんの所にいき、座ってしまった。ぱんだたんは取り出したお菓子をわけて、私にお菓子を渡す。

「お茶、持ってきたんだ。ぱんだたん飲むよね？」

頷きなら、ぱんだたんは最初に食べるお菓子を選んでいる、私は紙コップを取り出して、お茶を注ぎ、慎重にぱんだたんの横においた。

「最初はこれにゃ！、五円チョコ！」

私も選び始める、なんとよっちゃんイカがあるではないか、すぐさまこれをてにとり、ぱんだたん同様のう。

「最初はこれ、よっちゃんイカ！」

ぱんだたんはなんとすごい選択をするにゃと言いながら五円チョコを頬張る。私も同じく食べ始め、それから、お茶のすする音、食べる音だけが二人の会話であるかのように時間が過ぎていく。

そんな時間はあっという間に終わり、ぱんだたんは銅像を見つけ、そちらに歩いて行く。私はゴミを片付けて、一段落ついたところで、銅像のところについてみると、ぱんだたんはぼーとして眺めている。

聞くのものはばかられそうな感じなので、私も銅像を眺めてみた。

最初、言葉にだしたのは、ぱんだたん。

「なにをしたひとにゃ？。う～んわからないにゃ」

「だね・・・なにをしたひとなんだろうね」

大した事ではなかったが、ふたりとも銅像のモデルが何をして、銅像になったのかが、気になったが結局わからずじまいに終わったが、一応写真に撮っておくことにした。

眺めのいい景色の自慢の場所で有ることだけは、私は知っていたのでぱんだたんの持ち上げて、そこまで走って、絶好の位置に立たせた。

何もいわず、その景色を楽しみ、感動するぱんだたん。遠くの山々まで見えるその景色は、サイトで取り上げられるほど、最高のものだ、見た人は誰もが言葉をうしなう。

「ぱんだ、一生忘れないにゃ」カメラで撮ることはせず、目に焼き付けているようだった。



## 16(ひなまつり特別編)

---

今日は女の子のお祭り、雛まつりということで、ぱんだたんは朝からテンション上がっている。事前に用意していたひなあられは、見つけて食べちゃてなにをしてあげようかと考えていた。

「ひなまつりにゃ。にゃにゃ〜」といいながら、ぱんだたんは踊り始めた。

いきなり、携帯がなる、なんだと思ってみると、相手はじゃーまねさんで出してみると、ぱんだたんに変わってくれというので、踊っているぱんだたんを止めて、話し携帯を渡す。

「え〜移動するのにな。どこに」

転勤の話でもしてんのかなと思しながら、作業しているとぱんだたんの声が聞こえてくる。

「名古屋!？」

手作りのひな人形をぱんだたんに見つからないように組み上げていく、折り紙で作ったのでかなり、小さいのであるがなんとか、形にはなっただろうと思しながら、整えて完成させる。あと、甘酒もセッティングして、完了と。

ぱんだたんをみると、ちょうど電話は終わっており、びっくりしてぼうぜんとしているのかと思ったら、雛人形に気づいて、目がハートマークになっていそうな感じで先程のじゃーまねさんとの話はもうとんでいったのだろうと思うくらいの勢いで、雛人形の所に駆け寄る。

「女の子はいないはずにな、作ってくれたのにな？」

私は大きくうなづくと、ぱんだたんは私に抱きついて、ありがとにな、大好きになとって、おもいっきり抱きしめてくれた。

「痛いよ、ぱんだたん」

「あ、ごめんにゃ、嬉しくて嬉しくてにな、抱きついちゃたにな」

「雛人形、小さいけど我慢してね」

「なにを言っているにな、最高にな、こんなうれしい物はないにな」

「ならいいんだけどさ」

ぱんだたんは早速、ひなまつりの歌を歌い始める。いつものことだが、にゃはところところについているので、すこし歌おかしい部分があるが、楽しいのでいいだろう。

ひなあられと、甘酒をぱんだたんに出し、となりに座った。

「こんなこと、してもらえとは、思いもよらなかったにな」

「最初、ぱんだたんは人形と思っていたら、生きているぱんだだったとわかった時から、この計画ははじまったんだよ」ぱんだたんは不思議そうな顔で、なにかを言いたげな感じだった。

## 17(ひなまつり特別編2)

---

「ぱんだ、プロフィールにも書いたにゃ、ぱんだが操作してるって！」ぱんだたんは口調を強めに言い始める。

「ぱんだ、生きてるにゃ！、人形じゃないにゃ！、わかって欲しいにゃ！」  
私は混乱して、訳が分からなくなっていたが、ぱんだたんがなぜこういう事を言いだしのかを聞かなければと冷静になろうとするが、出来ずにいる。それは今までのぱんだたんが見せた表情、言葉とは全く正反対だからだ。

「突然、そんな事いわれたって・・・」

「・・・」泣き始めるぱんだたんをみて、赤く目をして顔みて、はっと冷静になる。

「ぱんだたん、来てからずっと、人形じゃない、生きてるぱんだ、いや、ひとりの女の子と見てきたよ」

「・・・」

「いろんな事を共有してきたじゃないか！、楽しいこと」

ぱんだたんの表情は見る見る変わってきた。

「そうにゃ・・・ここに来て感じたことは、辛さじゃなくて楽しさと安心にゃ。だから、つい当たってしまったにゃ」

「何があったの？」

ぱんだたんは語り出す。

「ぱんだがツイートしているなんて、信じてくれる人なんていなかったにゃ、中の人がいるんだろうと思われて辛かったにゃ」

ぱんだたんにも辛さがあり、誰にも信じてもらえてなかったことが、あの発言につながったのだ。

私はもうかける言葉はなかった、出来ることは抱きしめることだけだった。

<ひなまつり特別編 終わり（明日から本編に戻ります）>

今日は雪が降って、もうぱんだたんは、準備万端で外で、楽しんでいる。

「雪にゃ~~~~」

私もぱんだたんと雪だるまを作る約束していたんだっけと思いながら、ジャンパーを着るため、歩こうとした瞬間、ふと目眩がした、めずらしいなと思いながら、ジャンパーを着てぱんだたんの所に行く。

「雪だるま作ろうにゃ」

「じゃぱんだたんは、頭を作って」

「了解にゃ」と敬礼して雪玉を作り、それを転がし始めた。

私は下の部分を作るため、いくつかの雪玉をあわせて、それを転がしてあっというまに作り終え、ぱんだたんはまだ、慣れてないせいか終わってない間を利用して、顔の部分の部品をさがすことにした。

「顔にゃ顔にゃ」とぱんだたんは言いながら、四角の雪だるまの頭を作っているが、どうやってあーなったのかは、よくわからないが、個性的雪だるまの頭になるのではないかと思う。

物置きを探していると、丁度いい木の長さで三本見つかり、近くにあったバケツにいれて、ぱんだたんの所に行く。

「どうだい？ぱんだたん、出来た？」

「出来たにゃ、どうにゃ？」誇らしげなぱんだたんの顔だったが、前にあるのは長方形の雪だるまの頭だった。

「なんか、違うような気がするんだけど」

「そうかにゃ、これは最高の雪だるまのあたみにゃ」といいながら、私が作った下の部分をみて、満足した様子で頷いている。そんな誇らしげなぱんだたんに事実を告げるのは酷かと思わずに、雪だるまを完成させることにした。

「よいしょと」頭を持ち上げて、合体させるとロボット雪だるまの完成だ。それでもぱんだたんは満足した様子で、ぶつぶつと言っている。

「これなら、雪だるまコンテストで優勝できる作品にゃ、弟は出来ないにゃ」

いつも、姉弟で競いあっているのだろうか、弟の事を言っているが、私は弟が雪だるまを作るのは、うまいのではないかと密かにおもった。

「じゃ、目と口、鼻をつけるよ」

「ぱんだがつけるにゃ」そう言って、私から部品を取り、芸術家のように考えながら、つけて、叫んだ。

「完成、最高傑作にゃ」それを見た瞬間、笑いそうになり、なんとか堪える、完全にロボットの雪だるまなのだ、ぱんだたんの雪だるま像はこれなんだろうかと、思った。

家に一旦入ることにしたのだが、ぱんだたんが冷凍庫に入れようと必死に、私を説得していたが、大きすぎて無理だったので、やんわりと断ったが、不満そうな様子だった。

雪だるまを作りおえ、ぱんだたんは家の中から雪だるまの様子をみていた、私は異様に疲れが出て、ソファで横になっていたが、一向に疲れが取れずにいる。

ぱんだたんが私の方を向いて、ものすごいびっくりして走ってくる、なんかあたってんだろうかと思いつつ、疲れを取る方法を考える。

「顔が真っ青にゃ、どうしたにゃ、大丈夫かにゃ？」と、心配そうに言っているが、いつもの通りに何かを返そうとするが、どうも思いつかず、自分の状態が把握できないようだ。

「大変にゃ、熱があるにゃ、こんな状態になるんだったら、雪だるま作りなんてするんじゃないにゃ」そういうと、ぱんだたんはお布団や毛布など寝かせるために用意していた。

私はというと、意識がもうろうになっていて、ぱんだたんの言っていること、やっていることはわからず、漠然とした状況。

ぱんだは、そんな状態になっている彼を良くするために、じゃーまねに電話で聞いて、なんとか布団に寝かせることができた。

「ふ～なんとか、寝かせる事は出来たにゃ、あとは熱を下げなきゃいけないにゃ」といいながら、冷凍庫から氷を入れ物に移して、水を入れ、タオル濡らすと、彼の額におく。

ぱんだは、熱心に付きっきりで、タオルを交換して、次の日。

朝になり、ぱんだはおかゆを作り食べさせるため、笹を細かく刻み、おかゆに投入する、これはぱんだ家の伝統的な病気に効く薬なのだ、これでじゃーまねさんも直したらしいのだ。

彼は昨日より熱がひいてきたおかげで、なんとかおかゆは食べれそうだったので、ぱんだがおかゆを食べさせる。

「これでよくなるにゃ、安心眠るにゃ」と言いながら、ぱんだは額にキスをして、タオルをおく。

彼の病状は、いっきによくなっていき、次の日、起きれるまでになっていた、ぱんだはほっとして、カーテンを開ける。そして、じゃーまねに電話で連絡した。

「心配かけてごめんにゃ、なんとか回復したにゃ」

ぱんだたんがカーテンを開けて、じゃーまねに電話をしている。

「心配かけてごめんじゃ、なんとか回復したじゃ」と言って電話を切り、私の方をみていつもの笑顔で言う。

「眠れたかにゃ？」

「何があったんだい？」私は、一時的に記憶が飛んでいるようだ。ぱんだたんが最後の一言だけが唯一の手がかりだった、『大変じゃ、熱があるじゃ、こんな状態になるんだったら、雪だるま作りなんてするんじゃなかったじゃ』を以降、記憶がないことをぱんだたんにも説明した。

「熱が40度まで上がって、水枕とかで冷やして特効薬の笹入りお粥で、ここまで回復したじゃ」

「そうだったんだ。特効薬の笹？・・・前兆といえば、めまいがあったくらいで咳とか出てなかったし、なんだったんだらうね」ぱんだたんも困り果てた顔で私の話を聞いていた。

「病気がなんだったかはわからにゃいけど、ぱんだ家伝統の特効薬の笹は効いたみたいじゃ、ハッピーじゃ」

「え？、笹っていつもぱんだたんが持っているやつだよ」私はびっくりした、ぱんだたんのいつも食べている何気ない笹で、意識をうしなうほどの重体であった病状から、ここまで回復するとは。

「そうじゃ！」ぱんだたんはちょっと自慢気な顔で、言って笹を出す。

どう見ても、その笹はごく一般的なスーパーとかで、売っているものとは見分けがつかないが、すごい効能が隠されているのだらう。

「ふ～ん・・・」

「疑っているじゃ、これはじゃーまねの病気すら直したじゃ、いざという時、ぱんだの大切な人が苦しんでいるときに使うと魔法のように直してくれる笹じゃ」

「ぱんだたんがいなかったら、今頃どうなっていたかもわからなかったのは事実、看病してくれてありがとうぱんだたん」というと、ぱんだたんは顔を赤くした。

「にゃいを言っているじゃ、ぱんだはただ、苦しんでいる人をほっておけないだけじゃ、感謝されることはしてないじゃ」と言いながら、顔を手で覆う。

でも本当になんだったんだらうか、この風邪でもないような、疲れかとも違う、怖かった、ぱんだたんがいなければ、死んでもおかしくないレベル。心からぱんだたんにも感謝した日だった。

私が疲れが原因で休んで以来、初の外出する事になった。不安な私を、外に出かけるきっかけを与えてくれたのはぱんだたんであるが、本人もちょっと不安らしい。

「この前と同じくならなきゃ、いいけどにゃ」なんて、独り言をいっていた。でも私の前では、強気だ。

「ぱんだがついているにゃ！、安心するにゃ」といって、私の手を取り、出かける準備をさせようとする、私も結果、根負けしてしまったのだが、いいきっかけと思っている。このまま、外に出ないままでは体力が落ちてしまう。違う病気になってしまっはぱんだたんがかわいそうだ。

今まで、自宅の周りを散歩することはなかったので、ぱんだたんを紹介するついでもかねて、いくことになった。

「空気が綺麗にゃ、瓶に詰めてじゃーまねにも吸わせてやりたいにゃ」

ぱんだたんは本気で瓶に詰めそうな勢いで、瓶を取り出した。

「え・・・ぱんだたん、本気？」

ぱんだたんは本気な顔をして瓶の蓋を開けると、空気を入れるために瓶を振り回している。

「じゃーまねの健康を考えてたら、この空気は必要にゃ」というと、なんかそんな感じがしてきた、笹の事もあり、頷けそうになったがさすがに、やめたほうがいいのではということにした。

「意味あるの？。空気、瓶から漏れるよ」

「・・・漏れたら困るにゃ、う～～～ん諦めるにゃ」ぱんだたんは私の一言でやめてしまった、ほっと安心する。これで空気が漏れない方法を考えるとかわれたら、大変だと思ったが、そんなこともなくよかったと思っていると・・・

「仔犬にゃ」ダンボールの中を覗き込んで、ぱんだたんが言っている。私からはみえてなかったので、近づいてみると、柴犬の雑種のようなであった。

「どうしたんだろう？、捨てられたのかな」

「可愛そう、家で飼おうにゃ」ぱんだたんは私の顔を見て、言うが否定したいのだが、その愛らしさで迫られるとどうも、いいよといたくなるのだ。そこは否定せねばと思いつつ、言葉にした。

「飼ってくれる人、見つけるまでだよ」

自分で、言った言葉にびっくりする、ほんとは『飼えないよ。諦めようね』のはずだ、それなのに一時的であったとしても飼うということになってしまった。

言うまでもなく、ぱんだたんは仔犬にすでに決めていた名前を連呼して、目の前で感謝しているが、私はそれに応じるより先に、なんであんな事をしてしまったのかという、自己反省でいっぱいであった。

仔犬をみつけてしまったぱんだたん。

私は飼わないというつもりだったのに、飼ってくれる人を見つけるまでという、条件つきで飼うことにしてしまった、どちらにしてもだ、用意しなきゃいけないのでいっばいだ。早速、ぱんだたんと共に、ペットショップに行くことにした。

「一時的とはいえ、ちゃんとした餌をあげないとね」

「笹ではだめかにゃ？」

「犬が笹を食べている所、見たことないけど・・・」

ぱんだたんのポケには意表をつかれる所があり、しっかりした事を言う時もあるのだが、こうしてすごいポケをかますときもある。

「犬も笹を食べると思ってたにゃ」かなわない、これ以上笹ネタはやめておこうと思った。

「ところで名前は決まったのかい」一時的なので、本当はつけるべきではないのだが、ぱんだたんのことだから、もうつけてしまったであろう、たしか、見つけた時から名前を勝手につけて呼んでいたが、私は覚えていない。

「ぽんたにゃ！」仔犬を前を突き出すのと同時に叫んだ。

「なんで、ぽんた？、コロとか白とかじゃなくて。」

「響きは、ぱんだと似てるからにゃ、それでぽんたにしたにゃ」言われてみればという位で、なるほどではないところがすごいぱんだたんと話している間に、目的のペットショップにつき、仔犬の寝るところはダンボールとかで自作するとして、餌だけ買うことにした。

ぱんだたんは、もう目移りしているようだが、ここは心を鬼にして、仔犬用の餌を店員に場所を聞いて無理矢理引っ張って、餌を持たせるとレジまでぱんだたんを持ち上げて行くことにしたが、重すぎて失敗、餌を片手にもち、片手にぱんだたんの手を握り、レジに直行する。この時、初めて親の気持ちがわかったような気がする。

その間のぱんだたんの言っている事と言えば、『あの服、ぽんたにいいにゃ、この首輪も買うにゃ』『ねるところにこれ置くにゃ』最後の、置くやつとはなんだとは思ったが、見たら負けと思い、店を出るまで我慢した。店を出ると、さすがのぱんだたんも諦めてくれるのは助かる。

「仔犬の寝るところに置くやつってなんだったの？」

「アロマにゃ、あれを置くと犬の気持ちが落ち着いていいにゃ」犬用アロマなど、聞いたことないが私は見てなかったがあつたのだろうと思いながら、家に帰ることにした。

ペットショップの帰り道、ぱんだたん聞いてみた。

「ぼんたの飼い主どうやってさがすの？」

「う～ん、最初はぼんたを宣伝するポスターの制作にゃ」

「家の前にでも貼っておこうか、人通りおおいしね」

「あと、スタジオを借りなきゃいけないにゃ！」、ぱんだたんは普通に言ったが、なんでだろうと思いき、すぐ言葉を返せずにいた、それは、あまりにも意表をつくことばであったからだ。

「それとにゃ、スタイリストとメイクさんが必要にゃ」ぱんだたんは何事も無く、話を続ける。やっと、きりぬけて、言葉を返す。

「ぱんだたん、家にあるでしょ、スタジオが。それに優秀なスタイリスト、メイクさんも」不思議そうな顔をして、ぱんだたんは私の顔を見る。逆に意表をつくことに成功した。

「にゃ？」

「スタジオはいつもの部屋。スタイリストとメイクさんはぱんだたんが出来るじゃない！」

「そうにゃ、ぱんだ、自分の事を忘れていたにゃ」ぱんだたんはぽんと手を叩いて、言う。

「ぼんたを美しく、魅力的な犬を撮れるのはぱんだしかいないにゃ」よく、絵文字で(-`д´)キリッというのがあるが、それを体現したような表情のぱんだたん、早速、ぼんたのファンションを考え始める。私には作戦がある、それはぱんだたんはもぐもぐには勝てないこと、要するに食べるのが優先事項であるがゆえに、周りが乗り気であっても、独りよがりな行動でもあっても、食べることを始めると忘れてしまうのである。それなりに、ぱんだたんの話に乗っておく、家につき、大好物のお菓子を出してみることにした。

「ぱんだたん、はい、おやつ時間だよ」

いつも通り、ぱんだたんはおやつ時間となると、喜びのあまりダンスというか、踊りを始める、でも舞茸を見つけたわけではないのであしからず。踊りを終わると、もぐもぐタイムだ。

「モグモグ」

ぱんだたんにとっての一番の幸せな時間、それはぼんたといえども、邪魔はできない。ここで地震がおきたとしても、モグモグが続くだろう。事実、地震で騒いでいた私に気づかずにモグモグしていたこともある。地震が収まったあとに言われて、一人ぱんだたんが騒いでいたくらいだ。

モグモグしている間に、寝ているぼんたと、餌をたべている姿をデジカメで撮って、パソコンで編集してポスターを作り終えた。

モグモグが終わり、私のところに来て、今までのことを完全に忘れていた様子で、聞く。

「なにしているにゃ？」

作戦大成功、ぼんたのポスターを作ったことを説明して、外に貼りに行こうと誘うと、何事も無く、貼ることになった。ぱんだたんの弱点はもぐもぐだ。



## 終了

---

ぱんだたん、今日も元気です。

私は疲れ気味といっても、この前の寝込んでしまうような感じではなく、ぱんだたんについていけないだけで、ぱんだたんはもう、第二人とのツイッターでのTL会話や、じゃーまねさんとの電話での会議など様々なことをしながら、忘れずにもぐもぐ。

最近勉強も始めたようで、ヒラックマは本も出しているようで、なぜ人形の作者名なのかは謎だが、ヒラックマのツイッター本をぱんだたんはご熱心に読んでいます。

「ヒラックマはすごい、関心するにゃ、ツイッター歴が長いぱんだでも、わからないことが書いてあるにゃ」

「そ、そうなんだ。ぱんだたんでも、わからないことがあるんだ」

私も実はかなり、ヒラックマのツイッター本はお世話になっており、本当に人形が書いたことにしているのかと思うほど、丁寧に分かりやすく書かれている。

「今度、ぱんだ、USTをやろうかと思っているにゃ」

「え・・・なんで？」

「ぱんだ、これでも看板娘にゃ」と言いながら、私にウィンクする。事実と言え、そうなのだが、ぱんだたんは大中という中華雑貨店の公式アカウントのツイート担当でもある。私の所に来ているので現在ツイートは少なめになっている。弟がときどきやっているようだが、ぱんだたんに言わせると。

『まだまだにゃ、ツイートがなっていないにゃ』

だからといって、じゃーまねさんもだめらしい、その理由を、多く語らないぱんだたん。

それにしても、ぱんだたんは今度はUSTに手を出すらしい、そのためにじゃーまねさんと電話で、熱い議論が毎日繰り返されている。でもスカイプは、恥ずかしくて無理らしい、ぱんだたんの可愛い一面をまた発見した。

「なんで、スカイプは恥ずかしいの？」

「・・・とにかく恥ずかしいにゃ、言わせないでにゃ」顔を赤めてと言うと、私を叩く、10さいのはずなのに、大阪のオバチャンなみの強さだ、唯一の謎である。

そんな毎日が展開される、でもいつかは、ぱんだたんもじゃーまねさんの所に帰る日がやってくる、いや、そんな事はまだ先の話、考えないでおこう。